小さな駅の
クリスマスツリー

「毎年思うんだけどこのツリーってショボイよねえ」
「古臭いっていうか、ぱっとしないね、イルミネーションもないツリーってどうよ」
「駅もショボイし恥ずかしいね」
　木造の古びた駅舎から出てきた若者の会話が耳に入り、その地味なクリスマスツリーを見上げていた絵里は苦笑してしまいました。木は代替わりしたものの、七十年も昔から駅前の広場に飾られているツリーだということは、もう知る人も少なくなってきたようです。

　一九四八年、昭和二三年の秋、ヘレナは夫のジョンとリックという三才の息子と、アメリカからこの日本の町にやってきました。ジョンが船会社のこちらの支店長になったからです。大きな街に住む予定でしたが、牧師をしているヘレナの幼なじみを訪ねたとき、山に囲まれたこの小さな町がすっかり気に入り、ちょうど教会の隣の洋館が空き家になっていたので、すぐにここに決めたのです。近所に住む美和子という主婦が家事などを手伝うことになりました。ヘレナは美和子を、やわらかく抱きしめると、たどたどしく言いました。
「ヨロシクオネガイシマス」
　それからまるで友人のように美和子に接し、彼女を通して日本のことを学んでいきました。美和子も、茶色のカールした髪と青緑の瞳を持つヘレナを妹のように感じ、身振り手振りを交えての会話で家事を進めました。リックはやんちゃ盛りでしたが、日本語をスポンジが水を吸い込むように理解していきました。美和子の娘の絵里が大好きで、小学校からの帰り道に出会ったりすると
「エリ、エリー」
　茶色い髪を風にゆらしながら走って来て、そばを離れようとしませんでした。絵里とリックは、まるで姉弟のように広い庭で鬼ごっこをしたりブランコに乗ったり、時には手をつないで川沿いの道を散歩したりしました。そんなとき、絵里が話す日本の昔話に、リックは面白そうに聞き入ってから、質問攻めにして絵里を笑わせたり困らせたりしました。
　その年のクリスマス、リビングの暖炉の側に置いた大きなツリーを見つめていたヘレナは、深いため息とともに日頃の想いを吐き出しました。
「ねえジョン、この町の子供たちはあまりにも痩せていて私つらいわ」
「ヘレナ、君の気持ちは分かるけれど日本は戦争に負けたんだ。この町には爆弾が落ちなかっただけまだましなんだよ。立ち直るにはまだ時間がかかるよ」
「あー、でも何かできないかしら？今夜はクリスマスイヴなのに」
　ヘレナはあることを思いついて、大急ぎでたくさんのクッキーを焼きました。そして、一つずつ紙の袋に入れると、ツリーにリボンで結んでいきました。それを夕暮れの駅舎の隅に置いてもらったのです。その夜は、近くの子供たちにとって夢のようなひとときでした。靴下もコートもない子どもが一枚のクッキーを両手に握りしめ、
「めりーくりすます」
　訳は分からないまま、何度も大声で言いながら走って帰りました。
その様子を見たヘレナは、ミサのために教会へ行く道で、目を潤ませて言いました。
「取り合いのけんかをすると心配してたの。でも違ったわ。みんな並んでもらっていたのよ。なんてすばらしい子供たちかしら。リックもこの子たちと遊べるといいわね、ジョン、メリークリスマス！」

　五年の日々が流れていきました。ヘレナは、日本語が話せなくても町の人たちの中へためらいもなく入っていきました。少しずつ賑やかになり、商品も並ぶようになってきた駅前の商店街では、誰もが声をかけました。リックも近所の子供たちと騒ぎながら走り回っています。そして、ずっと絵里が好きで
「絵里と結婚する」
　そう大きな声で言って皆を笑わせています。十五才の絵里は、困ったように微笑むだけです。でもリックの深い青緑の瞳は、絵里の心にふうわりと灯をともしてくれるのでした。
　ところが、突然、この一家に悪魔が襲い掛かりました。リックが街で工事のトラックにはねられてしまったのです。即死でした。ジョンとヘレナの悲しみは慰めようもなく、牧師も側で寄り添うことしかできませんでした。美和子は、のど越しのいいものを懸命に作りましたが、ヘレナの目は落ちくぼみ、肩はうすくなってくるばかりでした。絵里も、骨ばってしまったヘレナの手を握りしめることしかできませんでした。そして、毎日、教会の裏にあるリックのお墓の前で昔話を読んで聞かせました。
　その年のクリスマス、ジョンとヘレナは、モミの木を駅前の広場に植えてもらいました。そして、天国のリックに見えるようにと、銀色の星を一番上に飾りました。通りかかる町の人は、リックを思って静かに祈ったのです。
　次の年、ヘレナたちは帰国することになりました。美和子を抱きしめたヘレナは、涙をぬぐおうともせず言いました。
「美和子、絵里、私の代わりにリックのお墓を訪ねてやって。そしてクリスマスにはリックと町の子供たちのためにツリーを飾ってやってください」
　それから毎年十二月になると、ヘレナから送金がありました。美和子と商店街の人は、ツリーを飾り続けようと決めました。そ

の後も絵里とヘレナはずっと文通を続けました。

　あれから六十年余り経ちました。もうみんないなくなってしまいました。ずっと町の人に守られてきたこのツリーもすっかり老いてしまいました。ただ赤と青と緑のガラス玉だけのツリーです。日本もこの町も年々豊かになり、夜まで光り輝くようになりました。ヘレナたちが暮らした洋館は立派なマンションに建て替えられています。来年には、この駅も新しくステーションビルに生まれ変わり、ロータリーもできるそうです。絵里も遠い街で孫に囲まれて穏やかな日々を重ねています。でも、クリスマスには必ずここを訪れてきました。「ショボイ」ツリーも絵里には輝いて見えるのです。写真を送り続けたヘレナもずいぶん前に亡くなってしまいました。今夜も、三人で天国からきっとこの銀の星を見ているのでしょう。なつかしさに絵里の目から涙がこぼれ落ちました。
「えり、ありがとう、いつもお墓を守ってくれて本当にありがとう」
　あの独特なイントネーションのヘレナの声が降ってきました。
「えり、けっこんしようね」
　そういうリックの元気な声もまざっています。
「さようなら、ここへ来られるのも今年でもう最後になるわ、さようならー」
　そう呟いた絵里は、杖を握り直すと、一歩一歩ゆっくりと駅舎の方に歩いていきました。初雪がイヴの小さなツリーをイルミネーションのように輝かせました。